

第1部《かわさき自然調査団が選んだ川崎の生物100選》

1 多摩丘陵の雑木林など、樹林に残っている生物、樹林で出会える里山の生物 34



川崎には多摩丘陵があり、そこには雑木林がある。
左写真の上2枚は、よく管理された春の雑木林である。
雑木林などの樹林には多様な生物が棲息している。



そして、雑木林などの里山の保全管理には市民活動が欠かせない。かわさき自然調査団は、市内全域の自然調査を実施しているので、各地の市民団体が活動している地区の生物調査については、お互いに気持ちよく活動できるように、当該活動団体との適切な連携が大切であると考えている。



早野聖地公園では早野聖地公園里山ボランティアが活動している。
左上から3番目の写真は、今年の早野聖地公園でのシダ植物調査の様子であるが、同里山ボランティアの副会長の小泉清さんが通りかかった近所の住民の対応をしてくれたり、細かい協力をいただいた。



市街地の真ただ中で身近な自然を再生保全している団体もある。
例えば、幸区新川崎の公園ではさいわい夢ひろば友の会が活動している。
左上から4枚目の写真は、今年、植物調査と観察会を合わせたような連携調査を行ったときの様子である。
市域全体の自然の状態を把握するためには街の中の調査も重要である。



1 タマノカンアオイ

ウマノスズクサ科 カンアオイ属 多摩丘陵の林内に生える常緑の多年草。花は基部に付き、落ち葉に埋もれた状態で咲く。分布は関東西南部だが神奈川県では多摩区、麻生区、横浜市青葉区の一部に限定的に分布している。

基準産地は川崎市橘樹郡登戸（現在の生田緑地の辺りと考えられる）。種子はアリが運ぶと考えられており、散布範囲が狭いため繁殖力が弱い。宅地開発により急激に減少している。

【絶滅危惧】国、県ともに絶滅危惧II類(VU)



2 コナラ

ブナ科 コナラ属の落葉高木。クヌギと並んで川崎の雑木林の代表樹種。伐採後の切り株に新しい芽を出し再生する力が強い。かつては薪炭材として、また椎茸栽培の原木に、落葉は堆肥に利用されていた。このため川崎の雑木林を優占する。雑木林は燃料革命・人手不足・宅地造成などにより激減している。



3 ヤマザクラ

バラ科 サクラ属の落葉高木。宮城・新潟県以西に自生するサクラだが植栽もある。現在では、サクラと言うとソメイヨシノを連想するが、吉野のサクラもヤマザクラだ。開花はソメイヨシノより少し遅いが、花と葉が同時に展開する様子が好まれている。丈夫で寿命の長い樹木で、巨木や古木が多く見られる。



4 マキノスミレ

スミレ科 スミレ属 日当たりの良い林内傾斜地に生える多年草。シハイスミレの変種とされているが、シハイスミレより小形。一般には中部地方以西に分布するとされているが、市内のごく一部に生育が確認されていて、保護活動がされているが、個体数は僅かで、アズマネザサやシダなど他の植物に負けて、絶滅寸前である。

【絶滅危惧】神奈川県の絶滅危惧 IA 類(CR)



5 ヤマルリソウ

ムラサキ科 ルリソウ属 山地の木陰や道端などに生育する多年草で、県内の分布は相模川以西・三浦半島と多摩丘陵の北部であり、個体数は多くない。古い地層との関連があるらしい。

花は花茎の先端に穂状につき（穂状花序）、先の方から順番に直径 1cm ほどの花を開く。



6 マヤラン

ラン科 シュンラン属 腐生植物。常緑樹林内に生える腐生菌と共生している多年草。県内各地に点在しているが、個体数は多くない。生育地が突然移動したりして、安定していない。神戸市摩耶山で発見されたのでこの和名が付けられた。

【絶滅危惧】国の絶滅危惧 II 類(VU)



7 サガミランモドキ (サガミラン)

ラン科 シュンラン属 腐生植物。関東平野南部で最初に確認されたので、サガミラン (相模蘭) と名付けようとしたが、よく似たマヤランの白花種をサガミランと名付けていたことからサガミランモドキ (相模蘭擬) と名付けられた。萼片の形、花の色など、マヤランより全体に小型で、緑色がかったことから区別できる。

【絶滅危惧】国 絶滅危惧 IB 類(EN)、神奈川県 絶滅危惧 II 類(VU)



8 エビネ

ラン科 エビネ属 雑木林・スギ林・竹林の林床に生える常緑の多年草。高さ 30~50cm。繁殖力はかなりあり、以前は市内各所の林の中で見られたが、花が目立つため盗掘が多く、自生地では減少し、極めて珍しくなった。開発による自生地の減少もあり、絶滅が心配される。

【絶滅危惧】国 準絶滅危惧(NT)、神奈川県 絶滅危惧 II 類(VU)



9 キンラン

ラン科 日本の代表的野生ランの一つ。花の色が黄色で、金色に輝く花の意味で名付けられた。花は 5 月に咲き、高さ 40~60cm。かつては雑木林の林内、林縁に多く見られたが、開発や雑木林の手入れがされなくなったこと、また花の美しさで、盗掘され、今は絶滅が心配な種になっている。この花は共生菌と呼ばれる菌と共に生育するため、移植しても育ちにくい。

【絶滅危惧】国、県ともに絶滅危惧 II 類(VU)



10 ギンラン

ラン科 キンランと同じく里山を代表する野生ラン。花の色が黄色のキンランに対して、白い花が咲くのでギンランと名付けられた。花は 5 月頃開花し、高さ 20~40cm とキンランよりやや小型。キンランは花びらを開いて華やかな感じだが、ギンランは 3~5 個の花があまり開かないのが特徴。川崎では多摩丘陵の樹林の林床に生育しているが、減少が著しい。



11 イチリンソウ

キンポウゲ科 丘陵の草地や林内に生える多年草で、4~5 月に、茎の先端に花を一輪咲かせることから、イチリンソウと名付けられた。茎の先に 2 輪咲かせるニリンソウも同じような環境に咲くが、イチリンソウの方が少ない。白い花びらのように見えるのはがく片である。

早春に芽を出し、花が終わって、実を結ぶと地上から姿を消す、スプリング・エフェメラル (春の妖精) と呼ばれる植物の一つである。



12 トキホコリ

イラクサ科ウワバミソウ属 山野の路傍や湿ったところに生える一年草。草丈が 10~20cm と小型で、花は 9~10 月、葉の付け根に花序を付ける。神奈川県内では鎌倉、湘南など 3 か所でのみ確認され、川崎では生田緑地で、場所を変えながら、数か所に生育している。名前は、時々、所により繁茂する、時に誇るという意味で付けられた。

【絶滅危惧】国 絶滅危惧 II 類(VU)、神奈川県 絶滅危惧 IB 類(EN)



13 コタニワタリ

チャセンシダ科 コタニワタリは、温帯気候を代表するシダで、普通は標高 1000m 以上の温帯林の林床に生育し、大きな株でもサッカーボールくらいの大きさである。

そのコタニワタリが市内に生えているということは、局所的ではあれ、多様な環境が川崎市に残されていることを表している。

【絶滅危惧】神奈川県の絶滅危惧 IA 類 (CR)



14 ベニシダ

オシダ科 春の芽立ちや、6~7 月頃に葉の裏にできる胞子のうを包んでいる膜、包膜が鮮やかな紅色をしていることから、ベニシダと名付けられた。スギの林や谷戸の湿った林床に、ごく普通に見られる。

スダジイ・タブ群落の標徴種、つまりスダジイ・タブ群落に特徴的に多く、環境の指標となる種である。



15 アスカイノデ

オシダ科 アスカイノデはやや乾いた林下に生育する。ベニシダと同じく、スダジイ・タブ群落を標徴する。普通種だが、関東地方を外れると珍しい。現在川崎市にはスダジイ林やタブ林は無いが、ベニシダやアスカイノデの群落があるということは、潜在的にスダジイ林やタブ林があったことを示す。ベニシダやアスカイノデの生育できる環境を残せば、スダジイやタブが優先する林になる可能性があるということを表している。

ベニシダやアスカイノデは普通にみられる種ではあるが、川崎の自然の多様性を表している種と言える。



16 アカスジキンカメムシ

鮮やかな金緑色をした、川崎周辺では最大最美のカメムシである。

雑木林などの樹上に生活して植物の汁を吸い、市内では北部の丘陵地を中心に棲息している。



17 シロスジカミキリ

日本最大のカミキリムシ。幼虫は広葉樹の生木に穿孔する。かつては雑木林や果樹園に普通に見られたが、最近は都市周辺ではかなり珍しい昆虫になっている。

【絶滅危惧】神奈川県 要注意種



18 ルリカミキリ

初夏に現れる小さなカミキリ。

雑木林に生えるカマツカなどを餌とし、ナシの害虫としても知られていた。一頃減少して、神奈川県では絶滅危惧種に選定したが、意外にも近年市街地の中のレッドロビン、ピラカンサなどの園芸植物から発生し、増えているようである。

【絶滅危惧】神奈川県 絶滅危惧 II 類(VU)



19 ガガンボモドキ

ガガンボモドキはシリアゲムシの仲間である。

湿潤な里山林に棲息し、梅雨のころ、写真のように前脚で葉にぶら下がる、奇妙な姿を見ることができる。雄が雌に餌を与える、いわゆる婚姻贈呈という興味深い行動をする虫である。



20 オオムラサキ

有名な日本の国蝶。

幼虫はエノキの葉を食べ、成虫は夏に樹液や発酵果実に来る。かつては神奈川全域に棲息していたが、都市化に伴い衰退し、川崎でも長い間確認されていなかった。ところが最近、市内の北のはずれの方で確認された。

【絶滅危惧】国 準絶滅危惧種(NT)、神奈川県 準絶滅危惧種(NT)



21 ミドリシジミ

ゼフィルスと呼ばれる樹上性のシジミチョウの仲間。

幼虫はハンノキの葉を食べ、成虫は梅雨のころ写真のような美しい姿を見せてくれる。ハンノキ林は湿地に形成される自然林であり、川崎にもわずかながら湿地林という生態系があることを教えてくれる。

【絶滅危惧】神奈川県準絶滅危惧(NT)



22 ツマキチョウ

尖った翅とオレンジ色の紋が特徴的なシロチョウの仲間で、成虫は春にだけ出現する。1年の大部分を蛹で過ごすチョウである。

幼虫の餌はタネツケバナなどのアブラナ科の植物で、田んぼや小川の近くなどの湿っぽい環境を好み、市街地には少ない。川崎にも健全な里山が残っていることを指標している。



23 エゴシギゾウムシ

シギゾウムシの仲間は長い口吻で木の実に穴をあけて、卵を産みつける。名前は口吻の形状が野鳥のシギの仲間の嘴に似ているところからつけられた。エゴシギゾウムシは、雑木林に生えるエゴノキの実を餌とし、写真のように黒と白の特にエレガントな模様をしている。新緑のもと、白一色のエゴノキの花が森の小道に落ちる頃、この虫は出現する。



24 ヤマトタマムシ

古代、法隆寺の玉虫の厨子にも使われた、有名な大型美麗甲虫である。広葉樹林に棲息し、特にサクラ、エノキ、ケヤキなどの大木、古木を好み、成虫は炎天下樹上を飛び姿や、伐採木に産卵に来るところを見かけることがある。カミキリムシ同様、幼虫がこれらの樹木の材を食べる。丘陵地帯に多く見られるが、市街地の鎮守の森、街路樹などに棲息することもある。

【絶滅危惧】神奈川県 要注意種



25 ウスバフユシャク

シャクガ科の蛾。1~2月の厳冬期に出現するが、メスは翅が退化して飛べない。日没になると、オスがメスのフェロモンに引かれ飛んできて交尾する。この光景は寒さの中で子孫を残す感動的なドラマである。4月初めに孵化した幼虫はサクラ、コナラなどの葉を食べて5月に終齢幼虫になると、地下に潜って蛹になる。川崎市ではフユシャクの仲間は14種ほど確認されている。メスは0℃以下で産卵できるように翅が退化しているので、移動能力の低い生物である。



26 キシノウエトタテグモ

人家の庭、雑木林の林床、崖地などの地面に穴を掘って住居をつくり、入口に片開きの扉をつける生態のクモである。クモは扉の内側にいて、扉の前を通る昆虫などを捕えて穴の中に引きずりこんで食べる。

【絶滅危惧】国の準絶滅危惧種(NT)

同じような生態のクモでは、国の準絶滅危惧種(NT)のカネコタテグモ、国の準絶滅危惧種(NT)であると同時に神奈川県絶滅危惧II類(VU)でもあるワスレナグモなども川崎には棲息している。



27 オオタカ

タカ科 ハイタカ属 カラスとほぼ同じ大きさをした猛禽類で、留鳥。川崎の北部地域でも時々繁殖している。ヒヨドリなどの小鳥類や、水辺でカモやカラスなどを襲うこともある。生田緑地や黒川、また多摩川などでも稀に見られる。

【絶滅危惧】国 準絶滅危惧種(NT)、神奈川県 繁殖期絶滅危惧II類(VU)、非繁殖期希少種



28 アオゲラ

キツキ科 アオゲラ属 低地や山地の林に生息する留鳥で、背や翼が緑色のキツキ。嘴の先から、尾の先まで 29 cm くらいある。足と硬い尾羽の羽軸で、木の幹に縦に止まり移動する。嘴で木をつつき、中の昆虫を食べたり、秋冬には柿などの木の実を食べたりもする。屋久島から本州以南で見られる日本固有種で、外国のバードウォッチャーのあこがれの鳥でもある。



29 サンコウチョウ

カササギヒタキ科 サンコウチョウ属 本州以南に渡来する夏鳥で、スギやヒノキなどの暗い樹林を好む。川崎では春と秋の渡りの季節に稀に見られる。雄の尾羽はとても長く、30cm 位もある。全長は 45cm。雄雌ともに目の周りと言がコバルトブルー。「フィチヒ、ホイホイホイ」の鳴き声が「月日星ホイホイ」と聞こえるので、「三光鳥」の名前がついた。林の中をヒラヒラと飛ぶ姿は森の妖精のようである。

【絶滅危惧】IUCN2001 準絶滅危惧種(NT)、神奈川県 絶滅危惧 II 類(VU)



30 オオルリ

ヒタキ科 オオルリ属 山や高原の沢沿いの林に夏鳥として生息する。川崎には春と秋の渡りの季節に立ち寄るのが普通であるが、市北部では、稀に繁殖が確認されている。オスはルリ色の美しい鳥で、美声の持ち主でもあり、日本三鳴鳥のひとつ。高い木の梢に止まり、高らかにさえずる。

【絶滅危惧】神奈川県 繁殖期・準絶滅危惧(NT)



31 キビタキ

ヒタキ科 キビタキ属 山地の林などに夏鳥として渡来する。落葉広葉樹林を好み、繁殖期は林の中程に止まり、変化に富む美しい声でさえずる。春と秋の渡りの季節には生田緑地、黒川、また稀に緑の多い身近な公園などでも見られる。生田緑地では時々巣立ち雛が見られたので、繁殖もしたようだ。雄は黄色と黒のはっきりした色で人気の小鳥。

【絶滅危惧】神奈川県 繁殖期・減少種



32 ルリビタキ

ヒタキ科 ルリビタキ属 川崎では冬鳥として主に自然度の高い雑木林で見られる。繁殖期は亜高山帯の森林で過ごす。雄の背面の色は鮮やかなブルーで、観察会でも人気が高い。雄の成長羽になるには 2 ~ 3 年かかり、生まれた年の冬は雌とそっくり。3 年目の冬でも完全なブルーになりきらない個体もいる。平均寿命は 1 年半位なので、青い鳥に成長するのは極めて少ない。

【絶滅危惧】神奈川県 繁殖期・絶滅危惧 II 類 (VU)



33 トラツグミ

ヒタキ科 トラツグミ属 日本で見られるツグミ類の中ではオオトラツグミに次いで大きく、繁殖期は山地の暗い広葉樹林で生息する。越冬期に平地や丘陵地に現れるが、近年観察例が少なくなっている。落ち葉をひっくり返しながらミミズなどを採食する。重さがツグミの2倍近くもあって、ゆったりとした動きなので、外敵からねらわれやすい。

【絶滅危惧】神奈川県 繁殖期・減少種



34 ミゾゴイ

ミゾゴイは地球上に 1000 羽しかいないと報道されたこともある地球規模の絶滅危惧種で、繁殖地は日本国内のみである。

冬は日本南部、台湾、フィリピン、中国南東部で越冬し、夏に日本の里山の暗い樹林で繁殖していると考えられている。

日本の里地・里山は開発の圧力を常に受けているので、繁殖地を失って消えていくことが心配されている。

そんな里山を象徴するような野鳥が、モニタリング調査の定点カメラによって撮影された。これは、川崎にも未だミゾゴイが訪れるような里山環境が残っているという証のように思われる。左の写真はノネコに追われたミゾゴイ。



【絶滅危惧】IUCN2001 では絶滅危惧 IB 類(EN)、国 絶滅危惧 II 類(VU)、神奈川県 絶滅危惧 I 類(CR+EN)

2 多摩丘陵の谷戸の水辺や湿地などに残る里山の生物 23



麻生区黒川はるひ野では公団による大規模住宅地開発が行われ、昔日の面影はないが、アセスメントで取り上げられた貴重な生物は黒川谷ツ公園（左の下の写真）とよこみね緑地の湿地（左の上の写真）に移植されている。

よこみね緑地特別緑地保全地区の湿地は水辺のある里山を守る会が保全活動をしている。



黒川谷ツ公園は閉鎖管理され、はるひ野里山学校が活動している。

共に、市内では貴重な環境を有している場所で、川崎の自然の調査地としては欠かせない場所である。調査についての了解も得られ、協力をいただいているので、この場で感謝を表す。



35 ホトケドジョウ

ホトケドジョウは日本固有種である。

昔は、多摩丘陵の谷戸のどこにでも、ウジャウジャいたという話だが、谷戸から湧水流が消えていくことによって姿を消しつつある。これは高水温の環境では生きられない淡水魚だからである。

川崎市内では多摩区の生田緑地、麻生区黒川、はるひ野地区に生き残っている。湧水の流れや田んぼ、湿地などを保全することができれば、これからも生き続けることができる。



ホトケドジョウは、3～6月に水草などに産卵するが、卵は直径1mm程度、2～3日で孵化し、孵化仔魚は3mm、孵化後15日で2cm、翌春には4～5cmに成長、成熟する。体形は太短い円筒形で、4対8本のヒゲがあり、中層を泳ぐ。

【絶滅危惧】国も県も絶滅危惧IB類(EN)



36 ゲンジボタル

成虫は初夏に出現し、その優雅な光の舞いは古来文物にも登場し、日本人になじみ深い昆虫である。

幼虫は流れのある水域に棲息し、カワニナを食べて成長する。川崎でも、丘陵地の源流部に生き残っていて、公園や田園地帯で狭いながらもまだ見られる場所がある。



37 ヘイケボタル

真夏に出現する小型のホタルで、ゲンジボタルより小規模な止水環境、田んぼや湿地に棲息する。

しかし、環境の変化に弱く、都市化だけでなく圃場整備の影響もあってゲンジボタルにも増して減少が著しい。この写真を撮った場所も、畑に転用するのか、最近埋め立てられた。

川崎では麻生区黒川に僅かに残る。

【絶滅危惧】神奈川県 準絶滅危惧(NT)



38 スジグロボタル

スジグロボタルは、氷河期の生き残りと言われているホタル科の昆虫で、半水生ホタルである。

寒冷地の生物で、「関東地方の平地に棲息していることは不思議なことだ」と、大場信義博士は話す。

成虫(左上の写真)は5～6月に現れ、日中に活動し、光らないが、幼虫は発光する。

左下の写真は2012年の大場博士とのスジグロボタル棲息地調査時のもの。



【絶滅危惧】神奈川県 準絶滅危惧(NT)



39 オニヤンマ

日本最大のトンボ。川崎では多摩丘陵の谷戸の細流や湧水湿地の滞水などに棲息する。成虫になるまでに5年かかるとも言われているが、水底の泥に身を潜めて、餌を待ち構えて捕食する。

成虫は6月下旬に出現し、谷戸の奥の上空に群飛する。その後は単独で行動するようになり、オスは縄張りをつくるが、10月頃まで見られる。



40 ミヤマアカネ

翅に幅広の褐色帯がある特異な中型アカトンボで、日本にはまぎらわしい近似種はいない。

丘陵地の谷戸、河川の水たまりや細流などに棲息し、都市化した地域では比較的珍しくなっている。

【絶滅危惧】神奈川県 準絶滅危惧(NT)



41 ニホンカワトンボ

成虫は春から初夏に現れ、川崎では丘陵地の源流部に生き残っており、雄は翅が橙色を帯びる。

カワトンボの仲間では日本各地で形質や行動が分化しており、多摩丘陵東部のニホンカワトンボは、古くはヒガシカワトンボと呼ばれていた。最近の遺伝子の研究により、ヒガシカワトンボの一部と、中部以東のオオカワトンボが、2006年に日本蜻蛉学会和名検討委員会でニホンカワトンボに統合された。

【絶滅危惧】神奈川県 準絶滅危惧(NT)



42 ヤマサナエ

成虫は初夏に現れ、オニヤンマのような黄と黒の模様を持っているが、だいぶ小さくて、分布も限られる。成虫は5~6月に見られる。ヤゴは谷戸の細流などの植物の根際などの砂泥中で生活し、自然度の高い里山を指標する。和名は里山のサナエトンボの意。サナエトンボの仲間は田植えが行われる初夏前後に出現するものが多いためサナエトンボの名がついた。

【絶滅危惧】神奈川県 要注意種



43 オオアメンボ

日本最大のアメンボ。丘陵地の湧水が流れ込む池や田んぼ、河川の伏流水湧出口の近くなどに棲息する。アメンボはカメムシの仲間、水面に落下した昆虫などの体液を吸って生きている。

【絶滅危惧】神奈川県 準絶滅危惧(NT)



44 ケラ

オケラの俗称で親しまれ、主に水田の畔などにみられたが、大都市近郊では減少している。また、河川敷や埋め立て地でも見つかることがある。シャベルのような前脚で土中に穴を掘って生活し、夜間発音する。湿土環境を指標する生物である。

【絶滅危惧】神奈川県 要注意種



45 ナガコガネグモ

草原や林縁の草の間、水田の中や畔、用水路などに垂直円網を張る。田んぼの稲を守っているようなクモであり、イナゴなど稲を食害する昆虫を捕食する。

成体は直線状のかくれ帯をつけ、その中央にとまっている。危険を感じると網を激しくゆする。9～10月頃に壺状の卵のうをつくる。



46 イヌタヌキモ

イヌタヌキモは根を持たず、捕虫囊によって動物プランクトンを食べる食虫植物。7～9月に、写真の様な花を咲かせる。

川崎最後のイヌタヌキモと思われるものは、はるひ野開発によって移植・保護されたが、公団から川崎市に保護地の管理が移った後に消滅した。

直前に標本をつくるために採取した数本を栽培管理していて、これが毎年開花していたので、北部公園事務所を通して、現地に野生復活させるべく、黒川はるひ野管理組合に提供した。

現在、その水辺の管理をしている「水辺のある里山を守る会」によって野生復活を目指した取り組みが行われている。

【絶滅危惧】国 準絶滅危惧(NT)、神奈川県 絶滅危惧 IA 類(CR)



47 ツリフネソウ

ツリフネソウ科 ツリフネソウ属 やや湿ったところに咲く一年草。高さ 50～80cm。花期 9～10 月。

花を細い花柄の先に吊り下げて咲くことから、この名前が付いた。多摩区の生田緑地、宮前区の東高根森林公園に群生している。



48 ノハナショウブ

アヤメ科 アヤメ属 北海道～九州の湿地や湿り気のある草地に生える多年草。草丈 30～50cm。地下茎を伸ばして群生する。県内では丹沢や箱根で見られる。以前は多摩丘陵の谷戸田に点在していたが、宅地化や埋め立て、耕作放棄で川崎の自生地は減少し、現在、はるひ野住宅地開発の時に移植し、保護管理されたものが僅かに生育しているが絶滅寸前である。花期 6～7 月。

【絶滅危惧】神奈川県 絶滅危惧 IB 類(EN)



49 トウゴクヘラオモダカ

オモダカ科 オモダカ属 主に多摩丘陵の湧き水のある湿地に生える。基準産地は横浜であるが神奈川県内では稀な植物。葉はヘラオモダカ、サジオモダカより小型。花弁は両者より大きい(6~7mm)。最下の側枝は普通2本(稀に3本)。花期7~9月。

僅かに残った川崎の種は、調査団が保護活動を行っている。

【絶滅危惧】国 絶滅危惧II類(VU)、神奈川県 絶滅危惧IA類(CR)



50 コマツカサススキ

カヤツリグサ科 ホタルイ属 本州~九州の山野の湿地に生える多年草。高さ0.8~1.2m。4~5個の節がある。花序を茎頂や節から出す。埋め立てや公園化で自生地が無くなってしまった。散発的に生える性質があるが、安定して生える環境は県内には無いとされている。

川崎では、調査団が谷戸の湿地環境を再生したことで復活した。

【絶滅危惧】神奈川県 絶滅危惧IA類(CR)



51 アケボノソウ

リンドウ科 センブリ属 やや標高の高い湿地に生えるリンドウ科の2年草。花は10月ごろに咲く。川崎のような平地に咲くのは珍しいことだが、1930年代の古い記録がある。近年生育が確認され、調査団が生育環境保全活動を続けており、花を咲かせている。花びらにある濃緑色の斑点を夜明けの空の星に見立てて「曙草」と名付けられた。



52 ヤマシギ

シギ科 ヤマシギ属 神奈川県では観察例の少ない冬鳥。頭のバーコードとまっすぐで長い嘴(くちばし)、ずんぐりした体が特徴の大きいシギ。日中は薄暗い林や藪の中に潜み、主に夕方から活動するが、稀に日中見られる事もある。湿地などで、長い嘴を地面にさしこんで、ミミズなどを採食する。

【絶滅危惧】神奈川県 希少種



53 マルタニシ

タニシは、昔は田んぼのサザエといわれ、貴重な食糧でもあった。

タニシの仲間は国内に4種、マルタニシ、オオタニシ、ナガタニシ、ヒメタニシが棲息している。タニシは、物の表面に着生した藻類なども食べ、水底の沈殿物(デトリタス)も食べ、水中の懸濁物は鰓で濾して食べるという生物であるため、水田に普通に棲息していたが、農薬など農業の近代化に伴って、近年急速に減少している。ところが、市内の谷戸の湿地に、マルタニシが生き残っていた。

日本原産ではなく、稲作とともに伝来したものだとする説もあるぐらい、昔の稲作文化を伝えてくれる生物の一つである。

【絶滅危惧】国 絶滅危惧II類(VU)



54 シマヘビ

シマヘビはカエルを主食としている。カエルの分布が稲作と共に広がったのに伴って、シマヘビの分布も後を追うように広がったと考えられている。

シマヘビは変異が多く、カラスヘビと呼ばれる黒化型もいるが、普通は明確な4本の縦縞模様が特徴。

4~6月に交尾して、7~8月に産卵、卵は約40日で孵化するので、9~10月には幼蛇に出会うことがある。

谷戸の田んぼとの関わりの深いヘビである。

日本固有種であり、全国的には普通に見られる。

【絶滅危惧】神奈川県 要注意種



55 ヒバカリ

ヒバカリは森林に棲息しながら、水辺を好むヘビである。

夜明けや夕暮れ時の薄暗い中で活動するが、時に雨天時には昼間も活動する。

泳ぎが上手で、魚類、カエルやオタマジャクシ、ミミズなどを食べる。

5~6月に交尾を行い、7~8月に1回に2~10個（平均6個）の卵を産む。卵は34~37日で孵化する。

【絶滅危惧】神奈川県 準絶滅危惧(NT)



56 アカハライモリ

アカハライモリは、本州以南に分布する日本固有種で、国内に棲息する唯一のイモリ科の生物。

水田、池、川のよどみなどで生活し、冬は水路の落葉の下や水辺の石の下などで冬眠する。

幼体は3~5年、樹林で生活しているので、水辺と雑木林のある谷戸が棲息環境になっている。

写真は、川崎市内で2005年1月に確認された個体。残念ながら、その後の確認情報はない。

【絶滅危惧】国 準絶滅危惧(NT)、神奈川県 絶滅危惧I類(CR+EN)



57 シュレーゲルアオガエル

日本固有種で、本州、四国、九州と周辺の島に分布している。

また、谷戸の固有種ともいわれ、春~夏の繁殖期は谷戸の水辺で過ごし、秋~冬は雑木林で過ごすので、谷戸以外では棲息できない。

水辺の土の中に産卵するが、卵塊は泡に包まれていて、一つの卵塊に200~300個の卵が含まれている。

この卵塊はシマヘビの外、カルガモやタヌキにも狙われる。

【絶滅危惧】神奈川県 要注意種

3 河川の河口～中流域、支流や用水路などで見られる生物 21



58 トビハゼ

トビハゼは、干潟の泥の上を這いまわる汽水域の魚類である。有明海と八代海のみに分布するムツゴロウの半分ぐらいの大きさで、東京湾以南の各地の泥干潟に分布している。川崎の干潟でも見られることから、川崎にも泥干潟があることを語ってくれている。

【絶滅危惧】国 準絶滅危惧種(NT)、神奈川県 絶滅危惧 IB 類(EN)、東京都区部 絶滅危惧 IA 類(CR)



59 アシハラガニ

アシハラガニは、河口や内湾の砂泥干潟やその上部の塩沼に棲息し、水辺から遠く離れることはない。

川崎では多摩川河口域のアシが生える干潟の砂泥に直径 3～4cm、深さ 40cm ほどの巣穴を掘って生活している。

主食はヨシの葉などの植物質の分解過程であるデトリタスである。

干潟の有機物の分解者として生態系の中で重要な役割を担い、その棲息孔を掘る性質によっても生物環境を立体的に豊かにするとされている。

川崎にも海があり、泥干潟があることを指標する生物である。



60 コアジサシ

カモメ科 アジサシ属 赤道を越えた南から繁殖のために日本に渡来する黄色の嘴と赤い足の小型のアジサシ。初夏には採餌のために嘴の先から水に飛び込むダイビングを見ることができる。河原など、小石の多い草地で、集団で繁殖する。2006 年、多摩川河口のいすゞ自動車跡地に 400～500 番(つがい)のコロニーが出現し、成鳥、幼鳥合わせて 1500 羽以上のコアジサシが棲息した。最近はこのような繁殖場所が少なくなり数を減らしている。

【絶滅危惧】国 絶滅危惧 II 類(VU)、県の絶滅危惧 I 類(CR+EN)



61 オオヨシキリ

ヨシキリ科 ヨシキリ属 夏の始めごろ、繁殖のため日本にやってくる夏鳥。ヨシ原一帯で「ギョギョシ、ギョギョシ」と真っ赤な咽を見せて大きな声で囀る。これは縄張りの主張や雌へのアピールと考えられている。主に多摩川などのヨシ原に巣をつくり、繁殖している。ヨシ原が減るにつれ、数を減らしている。

【絶滅危惧】神奈川県 絶滅危惧 II 類(VU)



62 コチドリ

チドリ科 チドリ属 夏鳥として日本に繁殖のために渡来する。目の周りに金色のリングがあり、茶色の背をした、スズメ位の鳥。卵や雛を守るため、飛べないふりをして、敵の目を自分にひきつけ、雛が安全なところまで行くと、さっさと飛んで逃げるということもする。主に小さな昆虫などを採食する。小石の多い草地などで繁殖し、多摩川の河原や、長沢浄水場、黒川の造成地などで繁殖が確認されている。

【絶滅危惧】神奈川県 繁殖期注目種



63 ミサゴ

ミサゴ科 ミサゴ属 多摩川河口から中流にかけ、空を飛んでいる姿が時折見られる留鳥。カラスより少し大きく、トビとほぼ同じくらいの大きさで、下面がかなり白い大型の猛禽類。水に飛び込み魚を捕まえる狩りをする。多摩川河口では、大きな魚を捕まえ、その魚を足の間にはさみ、杭などの上でゆっくり食べていたりもする。

【絶滅危惧】国 準絶滅危惧(NT)、神奈川県 繁殖期絶滅危惧 II 類(VU)、非繁殖期準絶滅危惧(NT)



64 チュウシャクシギ

シギ科 ダイシャクシギ属 春秋の渡りの時期に、多摩川河口に立ち寄る旅鳥。下に曲がった嘴を持つ中型のシギ。河口で一休みし、餌を食べ、体力を回復する。その後、春は北に、秋は南に飛んでいく。泥の中に嘴を突っ込み、カニやゴカイなど干潟の小動物を引き出して捕らえて食べる。近年河口の干潟環境の変化からか、数が減ってきている。

【絶滅危惧】神奈川県 絶滅危惧 II 類(VU)



65 キョウジョシギ

シギ科 キョウジョシギ属 頭から翼にかけて、白・黒・赤褐色のハッキリした模様がある小型のシギ。嘴は短く頑丈で、やや上に反っている。春秋の渡りの季節に多摩川河口に立ち寄り、餌を食べ、体力の回復をはかっている。岸辺の小石の多い場所で、カニや水生昆虫などを食べる。また石をひっくりかえして、探すこともある。近年、河口の干潟環境の変化からか、数が減ってきている。

【絶滅危惧】神奈川県絶滅危惧 II 類(VU)



66 ホウロクシギ

シギ科 ダイシャクシギ属 春秋の渡りの季節に、多摩川河口に立ち寄るシギ類の中で一番大きく、20 cm位の下に曲がった嘴を持っている。嘴を土の中に差し込み、カニやゴカイなどを採食する。過去 10 年の多摩川河口の定例調査では 2003 年 2 羽、2006 年 3 羽しか観察されていないが、2010 年に年間合計 5 羽も観察された。3～4年に 1 度位見られている。

チュウシャクシギ、キョウジョシギ、ホウロクシギの3種のシギも含めて、多摩川河口ではシギ類が少なくなってきた。

【絶滅危惧】神奈川県 非繁殖期・絶滅危惧 I 類 (CR+EN)、IUCN2001の LC



67 スズガモ

カモ科 スズガモ属 冬に大群で渡来する頭部が黒く腹部の白い小型のカモ。多摩川河口では、時に 1000 羽位の個体が川を埋めつくすことがある。その際、羽をパタつかせる音が良く聞こえてくる。足が体のやや後ろに付いていて、水の中に潜り貝類、カニ類などを採食する。また、足で水面を蹴って助走をして飛び立つ。



68 オオジュリン

ホオジロ科 ホオジロ属 晩秋に北の方から渡来し、ヨシ原で越冬する、スズメよりやや大きな小鳥。飛ぶと尾羽の両側に白い部分が見える。春に帰るころになると、頭が黒くなった個体も見られるようになる。ヨシの茎や葉で越冬する虫たちを探し出して採食する。多摩川下流域では普通に見られるが、中流域では少なくなる。ヨシ原の減少により、少しづつ数を減らしている。

【絶滅危惧】神奈川県 非繁殖期絶滅危惧 II 類(VU)



69 セグロセキレイ

セキレイ科 セキレイ属 黒と白のはっきりしたセキレイ科の鳥で、留鳥。顔は黒く目の上に白い部分があり、鳴き声は「ジジジジッ」と濁る。似ているハクセキレイは白い顔に目を通る黒い線があり、鳴き声は「チチチチッ」と澄んでいることで、見分ける。長い尾を上下に振りながら、歩いたりとまったりし、地面や空中の虫を捕まえて食べる。川崎の北部地域や、多摩川中流域などで見られるが、下流域ではほとんど見ることが出来ない。北海道から九州まで棲息している日本固有種である。

【絶滅危惧】神奈川県 繁殖期・減少種



70 アイアシ

イネ科 河口や海岸の砂地に生えるイネ科の多年草。高さは 1.0~1.5m あり。葉はヨシとよく似ているが、穂がヨシと違い、茎の先に 5~12 個の太い花序を出す。川崎では、多摩川の河口にヨシと混生している。ヨシの生育は広い範囲に見られるが、この種は海岸近くに限定される。

【絶滅危惧】神奈川県絶滅危惧 II 類(VU)



71 ジョウロウスゲ

カヤツリグサ科 池や沼、川岸など水湿地に生えるカヤツリグサ科の多年草。高さ 40~70cm、花期は 5~7 月。基準産地は箱根で、穂の様子が、上臈(身分の高い女官)のようだというのでジョウロウスゲと名付けられた。しかし、この記録のほかは海老名市産の標本が残されているだけで、その後 100 年近く、県内から採集されることは無かったが、川崎で登戸(2001/6)、多摩川河口の大師河原(2013/6)に確認された。但し、個体数は非常に少ない。

【絶滅危惧】国 絶滅危惧 II 類(VU)、神奈川県 絶滅危惧 IA 類(CR)



72 ウラギク

キク科 海岸や塩水の混ざる河口に生える 1~越年草。県内では多摩川河口のほか金沢区でのみ見られる。花径は 2cm ほど。以前は多摩川河口のヨシ原の縁に群生していたが、最近少なくなった。台風などの影響も考えられるが、河口は不安定なところなので、絶滅が心配される。

【絶滅危惧】神奈川県絶滅危惧 II 類(VU)



73 イセウキヤガラ

カヤツリグサ科 海水の出入りする河口域や塩水の混ざる湿地に群生する多年草。横走る根茎がある。茎の高さは 40~70cm になる。小穂は無柄で普通 1 個、時に 2~3 個付ける。苞葉(小穂を抱くようにつく葉)の 1 個は直立する。

県内の自生地は多摩川河口と三浦半島の一部だけである。

【絶滅危惧】神奈川県絶滅危惧 IB 類(EN)

※小穂とは) カヤツリグサ科、イネ科などの花は小花が穂状に集まった状態の花となる。これを小穂という。



74 カンエンガヤツリ

カヤツリグサ科 川岸や池などの湿地に生える大型で短命な多年草。一般には 1 年草と記載されることが多いが神奈川県博物館では多年草として扱っている。

高さは 80~120cm になり、大きな株になって叢生するが、生育場所は一定しない。多摩川と鶴見川の河川敷で見られたが、周囲の草の繁茂や、冠水により消滅する。多摩川では今年確認できなかった。

【絶滅危惧】神奈川県 絶滅危惧 IB 類(EN)



75 ヒシ

ヒシ科 水深2m以下の池や沼・水路の淀みなどに群生する浮遊性の一年草。葉は長さ、径とも3cmほどで、膨れた茎が浮き袋となって水面に浮く。果実は茎の根元につき水中で熟す。

県内の生育地は3ヶ所であるが、そのうちの1箇所は麻生区早野である。池や水路の清掃により生育が脅かされ、絶滅が心配されている。

【絶滅危惧】神奈川県 絶滅危惧 IA 類(CR)



76 セキショウモ

トチカガミ科、水の比較的きれいな湖沼、河川、溜池、水路などの水深1m以下の水中に生育する沈水性の多年草。水底の泥の中に走出枝を出して増える。雄花は水面に花粉を流し、雌花は水面までバネ状に花茎を伸ばして受粉する。左写真の白い茎の先端に雌花がある。

県内では芦ノ湖と三ツ池しか確認されていなかったが、多摩川や支流、用水路などで見つかった。台風による増水や、水路の改修工事などにより絶滅の恐れがある。

【絶滅危惧】 神奈川県の絶滅危惧 IB 類(EN)



77 キイロホソゴムシ

河口域のヨシ原に棲息するゴムシ。世界的にも分布は狭く、日本の関東地方、東京湾や太平洋岸の限られた場所でしか見つからない非常に珍しい甲虫である。

銚色で首の長い奇妙な形をしていて、肉食である。

川崎の記録は雛倉が採集したものである。

【絶滅危惧】 国 絶滅危惧 IB 類(EN)、神奈川県 絶滅危惧 I 類(CR+EN)



78 カワラバッタ

丸石河原に棲息するバッタである。

多摩川河原では50年近く絶滅したといわれていたが、2007年の洪水のあと復活し、増えていたが、また最近外来雑草の繁茂に伴い減少傾向にある。

写真のように石ころの色にそっくりで目立たないが、飛んだときは後翅のブルーが鮮やかである。日本には青い翅を持つバッタはほかにはいない。

【絶滅危惧】神奈川県 絶滅危惧 I 類(CR+EN)、東京都区部では絶滅(EX)



79 ハグロトンボ

昔は多摩川河原のヤナギの茂みなどに集まっている光景が普通に見られたトンボ。流水に棲息し、黒い翅が印象的。

都市河川でも最近復活傾向にある。

水草に産卵する習性があり、コンクリート三面張り護岸の川では、成虫が見られることがあっても、幼虫はいない。移動能力にすぐれていて、時に源流域で見られることもある。【絶滅危惧】 神奈川県 要注意種

4 昔から親しまれ、普通に見られていた生物 21



80 オシドリ

カモ科 オシドリ属 神奈川県では湖や川の上流などで、集団で越冬する。岸辺に広葉樹がかぶさるような環境に棲息し、草の実やドングリなどを採食する。川崎市内では唯一、川崎国際生田緑地ゴルフ場の滝沢池で越冬している。仲の良い夫婦をおしどり夫婦と呼ぶことがあるが、オシドリの雄と雌がいつも連れ添っているのは冬から春の間だけで、毎年相手を変えているようである。生田緑地の近くにおし沼と言うバス停があるが、この辺りには昔オシドリがいた沼があった。

【絶滅危惧】国 DD、神奈川県 繁殖期・希少種、非繁殖期・減少種



81 ツバメ

ツバメ科 ツバメ属 春に南の国から渡ってくる燕尾服姿のスマートな夏鳥。駅や商店などの軒下に営巣する様子を真近かに見る事ができる。昔は『ツバメが巣をかけるとその家は繁盛する』と言われ大切にされていたが、この頃は巣から落ちるフンが嫌がられて巣を落とされることもある。又農耕地などの減少で、餌や泥などの巣材も不足し、減少傾向にある。夏から渡去する秋まで、河川などのヨシ原で集団ねぐらを形成するが、これは時に数万羽にのぼることもある。

【絶滅危惧】神奈川県 繁殖期・減少種



82 シジュウカラ

シジュウカラ科 シジュウカラ属 樹林、住宅地、河原などで普通に見られる留鳥。木の洞などに営巣するが、巣箱もよく利用する。繁殖期には子育てのため、多くの昆虫を雛に運ぶ。胸から腹にかけて、黒いネクタイ模様が特徴の可愛い小鳥。



83 カワセミ

カワセミ科 カワセミ属 川や池などの水辺に棲息する留鳥。コバルトブルーの姿から飛び宝石ともいわれる人気の鳥。水辺の木の枝などから、ダイビングして小魚やザリガニなどを捕らえ、戻って枝などに打ち付けて頭から飲み込む。小さな水辺でも見られ、棲息域を広げている。



84 ウグイス

ウグイス科 ウグイス属 笹ヤブを好む留鳥。「ホーホケキヨ」のさえずりは有名。オオルリ、コマドリと共に日本三鳴鳥のひとつになっている。うぐいす餅の鮮やか色はメジロの色で、メジロをウグイスと勘違いしている人もいる。

冬の鳴き声はチャッチャッチャッと聞こえ、笹鳴きと呼ばれている。



85 タヌキ

タヌキは、日本、朝鮮半島、中国、ロシア東部に自然分布するが、1928年に毛皮目的でソ連に移入されたものが野生化し、東欧に広がり、更に、フィンランド、ドイツ、フランス、イタリアでも目撃されるようになっている。

国内では、北海道にエゾタヌキ、本州、四国、九州にホンドタヌキの2亜種が棲息している。

古来、人間の生活に近い所にいて関わりを持ってきたが、現在も、身近な場所で生活しているようである。

モニ 1000 生田緑地の中大型哺乳類調査ではタヌキ、ハクビシン、ノネコが優占していた。川崎に棲息する中大型哺乳類の中では最も個体数が多いかも知れない。今年はこのように柿を銜えた姿が多数撮影された。



86 ヒガシノホントカゲ（ニホントカゲ）

ヒガシノホントカゲは、樹林地から人家周辺まで広く棲息する日本古来のトカゲである。幼体は尾に鮮やかな青い光沢がある。石垣や土手など、身を隠す立体物が現代においては減っているため減少している。

2012年に、ニホントカゲは本州西部、四国、九州、大隅諸島に分布するものとされ、東日本の種は形態、DNAが異なることからヒガシノホントカゲ *P. finitimus* Okamoto & Hikida, 2012 の名で記載されることとなった。

【絶滅危惧】神奈川県 要注意種、東京都区部 絶滅危惧 I 類(CR+EN)



87 カタツムリ

カタツムリは童謡にも歌われ、昔は子供たちの身近に普通にいた生物である。

川崎で見られる大型(殻の直径が3cm以上)のカタツムリは2種類で、右巻きならミスジマイマイ、左巻きならヒダリマキマイマイである。

写真はミスジマイマイ。関東地方では最も普通のカタツムリで、貝殻に3本の筋があることからその名がある。この紋様には変異が多く、明瞭なものから殆ど無いものまである。都市化により湿っぽい場所が減少したことから、身近な生物ではなくなりつつある。



88 ヒガシキリギリス

キリギリスは気だるい夏の午後の風物詩で、誰でも知っている昆虫でしたが、草丈のある草地の減少により、都市近郊では衰退が著しく、今や川崎ではかなり珍しい昆虫になっている。

肉食性が強く、真夏の炎天下を中心に、ギー・チョンと鳴くが、草やぶに巧みに隠れるのが上手く、発見は難しい。

最近の研究により、日本の東西で2種に分けられ、川崎で見られるキリギリスはヒガシキリギリスとなった。

【絶滅危惧種】神奈川県 要注意種



89 トノサマバッタ

開けた丈の低い草地に棲息し、市内では南北に広く分布している。多摩川に多いが、丘陵地帯の造成地や臨海部の埋立て地にも棲息している。生田緑地など樹林が優占する緑地にはあまり見られない。



90 オオカマキリ

丘陵地や河川の林縁・草地などに棲息する大型のカマキリ。子供にもなじみ深い昆虫である。

第1～7次川崎市自然環境調査報告書にも神奈川県昆虫誌2004にも川崎の記録が無かった。カマキリの仲間は普通種過ぎて、誰も報告していなかったことが、第7次調査の編集時に判明したのである。



91 アブラゼミ

昔から川崎では市街地の植樹帯から樹林地まで広く分布し、普通にみられるゼミである。

【関連】

川崎では、この外、ミンミンゼミ、ニイニイゼミ、ヒグラシが普通に見られる。ハルゼミは川崎から松林が消えたことで、棲息環境を失い消えたかも知れない。また、南方起源のクマゼミも点々と分布しつつある。



92 ウスバカゲロウ (アリジゴク)

幼虫は有名なアリジゴク。縁の下や岩陰などの砂地にすりばち状の巣をつくり、落下してくる昆虫などを捕食する。

成虫は夏に現れる。川崎では神社周辺の樹林などで多く見られる。



93 トラマルハナバチ

土中に営巣する社会性ハナバチで、女王は春、働き蜂は初夏から秋に出現する。各種の花を訪れて花粉や蜜を集めるが、長い舌を持っており、筒状あるいは漏斗状の、蜜腺が深い花を好む。里山林に棲息していることが多いが、北部の付近に樹林が多い地域では、夏季を中心に、市街地の人工植栽に成虫がみられることもある。



94 カブトムシ

今も昔も子どもたちに一番人気の甲虫。

里山の二次林に多く棲息。

幼虫は腐葉土を食して成長し、成虫は樹液や発酵果実に来る。川崎でも北部の丘陵地の雑木林などにみられる。



95 オオミノガ

蓑虫(みのむし)と呼ばれて親しまれているオオミノガは幼虫が蓑の中で生活して、バラ科、ブナ科などの樹木の葉を食べている。成虫は、年2回6月、9月頃に出現する。メスは蛆虫の形をしていて、飛べない。オスがメスの蓑に飛んできて、交尾して蓑の中で産卵する。

蓑の風景は清少納言の枕草子、また俳句の季語などに使われて、平安時代から庶民に親しまれてきた。

1980年代まで県内各地で普通に見られたが、1990年代に急速に減少している。減少原因は都市化のみでなく、ウイルス説、オオミノガヤドリバエ説など様々に言われているが不明。

【絶滅危惧】神奈川県 絶滅危惧II類(VU)



96 オオミズアオ

オオミズアオは大型のヤママユガ科の仲間である。広げた翅は12cmと大きく、水色で美しいので、子供から大人まで広く知られている。

幼虫はサクラ、コナラ、モミジなどの落葉樹の葉を食べて成長し、成虫は年2回5月、8月頃に出現する。主に雑木林に棲息するが、市街地の庭木などで発生することもある。

終齢幼虫は8cmになって、鳥などに捕獲されないように緑色の保護色で身を守っている。

2000年以降減少しているが、大型のヤママユガの仲間は行動範囲が広いために、都市化、天敵捕獲の影響を受け易い。



97 ネコハエトリ

網を張らず、徘徊して獲物を狩るクモで、低木の葉の上などに最も普通に見られる。オス(頭腹部、脚が黒い)同士を戦わせるホンチという遊びが神奈川、千葉にあり、半世紀前の川崎では、子供たちの遊びとして流行っていた。



98 シュンラン

ラン科 シュンラン属 乾燥した林内に生える多年草。葉は長さ20~30cm。以前は多摩丘陵の処々で見られたが栽培のための盗掘により激減した。

北海道~九州に分布。花期3~4月。



99 タチツボスミレ

スミレ科 スミレ属 平地から丘陵まで普通に生えている。日本の春を代表する花の一つ。花期は4～5月。花のころの高さは10cmほどだが、花が終わると高さ30cmほどになる。

スミレ、アオイスミレ、コスミレ、ツボスミレ、ナガバノスミレサイシン、アカネスミレなど川崎で17種のスミレが確認されているが、タチツボスミレが圧倒的に多く、川崎の全区で確認されている。



100 ヤマユリ

ユリ科 ユリ属 山野に自生する日本特産のユリ。高さ1.0～1.5m。強い芳香がある。花被片が反り返り、黄色のすじと、赤い斑点がある。花期は7～8月。神奈川県の花。球根は食用にされる。かつては神奈川県の主要な輸出品であった。

第1部 《川崎の生物100選》

発表者／種子植物班(吉田多美枝、佐藤登喜子)

シダ植物班(大貫はるみ)

野鳥班(佐野悦子、水田茂子)

昆虫班(野澤興一、雛倉正人)

クモ班(成田和子)

水田ビオトープ班(岩田臣生)

進行役／事務局(岩田芳美)

